

グランシップ開館3周年記念事業

おいでよ、グランシップへ!

わんぱく
2002

遊んで学べるこどもパーク

3/16(土) - 31(日)

AM9:30~PM5:00 (入場はPM4:00まで)

ご存知の通り、五感とは、視覚（見る）・聴覚（聞く）・嗅覚（嗅ぐ）・味覚（味わう）・触覚（触る）という5つの感覚であり、これらは実際に体験することによってのみ刺激される。五感による情報が脳に送り込まれることで、情操は育まれ、好奇心は広がっていく。要するに五感をいかに鍛錬するかは、いかに多くのことを体験するかなのだ。

近頃、噂のチルドレンズ・ミュージアムって？

ところで、「チルドレンズ・ミュージアム」という言葉を耳にしたことはないだろうか。1世紀も前、ニューヨークのブルックリンに初めて設立され、現在、アメリカにおけるその数200以上。このミュージアムが、いわゆる一般の美術館や博物館と決定的に違うのは、対象を子どもとしていることほかに、「Do not touch!」（触らないで）というサインがなにごとでもある。その代わりに「Please touch!」（触って）と書かれ、子どもたちが展示物を自由に触ったり、動かしたりすることができ。したがって、まず、館内の雰囲気はぜんぜん違う。あちこちで笑い声や歓声があり、これがミュージアムかと思えるほど賑やかで明

「こども」が主役の2週
グランシップまるごとト



3/16(土)~31(日) AM9:30~PM5:00 (入場PM4:00まで)
 チケット 発売中 一般(高校生以上) 前売600円(当日800円)
 小・中学生 前売300円(当日400円) (税込)

「シャボン玉」



このインタラクティブ作品の主役は、パーソナルなシャボン玉と自分のカラダ。カラダがつくる影がシャボン玉に触れると跳ねたり、はじけたりしながら、音を鳴らし、そこにまた一つの作品ができあがる。
 作家/ウォルフガング・ミュンヒ十古川聖

「境界線」

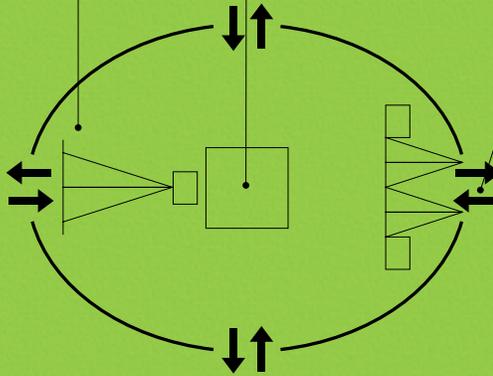


天井から床に投写される線、それは空間を分かつ線である。例えば、作品空間に観客が一人なら何も起こらないが、二人で入ると中央に1本の線が現れ、空間を二分する。二人が動けば、二人からの距離が等しくなるよう線も動いていく。
 作家/スコット＝ソーナ・スニップ

「The Reactive Square」
「Tap Type Write」

「The Reactive Square」は、マイクからの音声によってグラフィックスが変化。一方、「Tap Type Write」では、画面上の文字がマウスの動きにあわせてタップダンスを披露。
 作家/前田ジョン

「石黒 猛 作品」
「クワクボ リョウタ 作品」



「バボット」

センサーやコンピュータを用いて空気を布の中に送り込むという原理で、バルーン型ロボットが作動。テクノロジーアートならではの大きい遊びゴコロが体感できる。
 作家/高橋士郎
 * その他、クワクボリョウタ、石黒猛が参加。

カラダが描く!?
不思議体験

6階交流ホール わんぱく不思議体験館

大人の好奇心にもビビッ!科学が感性とタッグを組んでおくる不思議ワールド。センスとカラダ、テクノロジーを駆使して、メディアアートに挑戦!



おいでよ、グランシップへ!

わんぱく 2002

遊んで学べるこどもパーク

五感をびびりやっつけて磨くか。鍛えるか。

「三つ子の魂百まで」という。昔の人は人間というものを案外鋭く見抜いていたようで、脳生理学の見地からいうと、これはかなり本当らしい。というのも、脳組織の約60%は3才までに発達し、その頃には言葉も基本的な生活習慣もかなり身についてくるといことが最近の研究からわかってきたからだ。もちろん3才というのは、あくまでも成長過程上の最初の節目であり、その後、続く十数年間が情操や性格形成、知的発達を促す大事な時期であることはいままでもない。そして、こうした発達の手台となるのが、感覚的な機能、いわゆる五感の鍛錬である。



せかいカルチャー・うちゅうネイチャー

「不思議のこころ」や「理解と発見」の視野を、身の回りの環境から、広く全世界へ、さらに地球・宇宙へとのぼしていこう。世界の民族衣装やフェイスペイントの体験。生きた象形文字「トンパ文字」を使ってことばや文字の面白さを発見!あたりまえと思っていた地球の意外な姿が浮かび上がる。



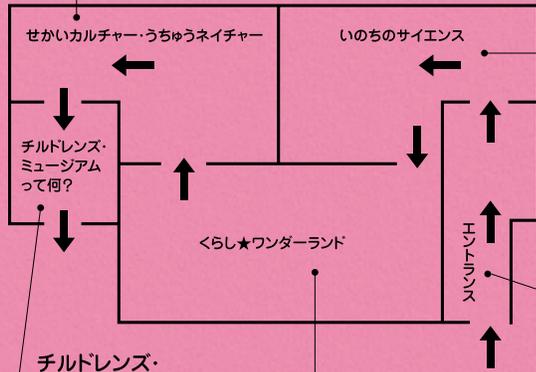
スペインのダンサーに変身「世界の衣装を着てみよう」
協力:篠山チルドレンズミュージアム

いのちのサイエンス

いのちのはじまり、生きていることの不思議と素晴らしさ。等身大の骨格や内臓パズルに触れて身体のしくみを体感。食べ物とうんちの関係など身近なテーマから自分や生き物たちの生を実感できる。ほんものの「動物たちのうんち」が展示され、触ることもできます!



等身大の骨格模型に触れる「スケルトンくん」
協力:日本スリービー・サイエンティフィック株式会社



理解は驚きに始まるー
触るとますます面白い
チルドレンズ・ミュージアム

6階展示ギャラリー わんぱく博物館

全国各地からハンズ・オン(参加体験型)展示が集結し、話題のチルドレンズ・ミュージアムがグランシップに出現。子どもの視野の広がりをたどりながら、子どもも大人も遊んで学ぼう「いのち」「くらし」「せかい」「うちゅう」

チルドレンズ・ミュージアムって何?

世界の優れたチルドレンズ・ミュージアムからユニークな事例を紹介。今回の展示にご協力いただいた国内の先進施設も併せてご紹介します。

くらし★ワンダーランド

家族や自分のすむ家、そしてふるさと静岡を見つめよう。お家の中の道具を使ってみたい、小さなまちで社会の仕組みを体験する。ピュフェの絵画をモチーフにした大型パズルなど、遊びのなかで、くらしのなかで、アートに触れて楽しむコーナーも。自由参加の街並み模型の協同製作は、全てエコロジカルな素材を使用。ものを大切にすること、ものとくらしのつながりにもふれる。



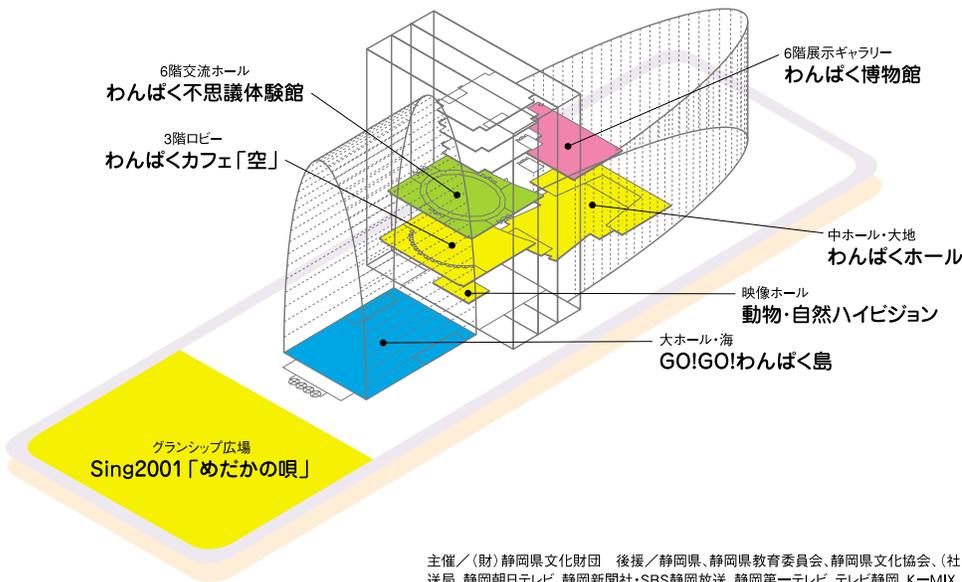
日用品の中にかくれているいろんな顔を発見!
「ぼくたちのFACE・フェイスわかるかな?」

エントランス

17万本ものピンを使った「虹色のピンスクリーン」。触ったときの不思議な感触とピンの虹色のゆらめきで、チルドレンズ・ミュージアムの世界へといざなう。



「虹色のピンスクリーン」
協力:りょうぜんこどもの村「遊びと学びのミュージアム」



わんばんく島」、インタラクティブ
アートの不思議な世界が広がる
「わんばんく不思議体験館」など、
グランシップがまるごと「こどもパ
クに変身！心の内からわきあが
る好奇心のアンテナのまま、触つて
遊べば、子どもはもちろん、まず
は大人が、この五感の刺激を楽
しんでみては？

参考文献「チルドレンズミュージアムめぐり」日黒実著

主催／(財)静岡県文化財団 後援／静岡県、静岡県教育委員会、静岡県文化協会、(社)静岡県私立幼稚園振興協会、静岡県保育所連合会、NHK静岡放送局、静岡朝日テレビ、静岡新聞社・SBS静岡放送、静岡第一テレビ、テレビ静岡、K-MIX、FM-HI!76.9、エフエムしみず76.3MHz、FM Haro!、朝日新聞静岡支局、産経新聞社静岡支局、静岡リビング新聞社、中日新聞東海本社、中日ショッパー、日本経済新聞社静岡支局、毎日新聞社静岡支局、読売新聞社静岡支局協力(50音順)／(株)アネビー、ICC(NTT インターコミュニケーション・センター)、愛媛県立とべ動物園、(財)沖縄こどもの国、京都子どもミュージアムをつくる会、五味 太郎、埼玉県こども動物自然公園、学校法人笹田学園デザインテクノロジー専門学校、篠山チルドレンズミュージアム、(財)静岡県生涯学習振興財団、静岡デザイン専門学校、株式会社写真化学、新富士製紙株式会社、学校法人染葉学園東海文化専門学校、チーム未来おきなわ、TRI+、西本 修、日本スリーピー・サイエンティフィック株式会社、(株)ネットアドバンス、ビューフェ美術館、福島県霊山町りょうぜんこどもの村「遊びと学びのミュージアム」、富士ゼロックス(株)、(株)富士通インフォソフテクノロジー、ふじのくにゆうゆうクラブ、文部科学省宇宙科学研究所、専門学校ルネサンス・アカデミーオブデザイン



子どもが好きなモノ大集合！
グランシップ3年間の軌跡も。

3階ロビー わんばんくカフェ「空」

- おもちゃコーナー
- お菓子コーナー

中ホール・大地 わんばんくホール 劇場へようこそ！

- グランシップポスター展
中ホール1階ロビー・2階ホワイエ
- エレクトーン&ピアノ みんなでオンステージ(3/16~17)
- ファミリーコンサート(3/21)
- ふじのくにゆうゆうクラブ発表会(3/23~24)
- バックステージツアー(3/28~29)
- おかあさんといっしょファミリーコンサート上映(3/28~29)
- 影絵コンサート「竹取物語」(3/30)
- 邦楽ワークショップ(3/31)

音楽、マジック、映像、影絵など
エンターテイメント満載。

グランシップ広場 Sing2001「めだかの唄」

グランシップが例年実施している空間プロデュース事業「SING」より、昨年の優秀賞作品を製作・実現。広場を小川に見立て、自然の風や光によって「めだか」が泳いだり、音楽を奏でたり。春の空の下、ひとときのヒーリングを。

作者／高瀬弘恵
専門学校ルネサンス・アカデミーオブデザイン
グラフィックデザイン科1年在籍

自然の風と光に
泳ぐめだか、奏でるめだか。

親子でホッ。
映像とくつろぎの空間。



映像ホール 動物・自然ハイビジョン

- NHKハイビジョン放映

るく、豊かな色彩があふれている。イタリヤの教育学者モンテッソーリは、「教育とは大人が子どもにも厳しく教え込むものではなく、子どもたちが自発的に学びたいと思う環境づくりが重要である」と説いたが、近頃、体験型学習が注目され、ワークショップなどの創造的なプログラムが盛んに行われるようになったのも、こうした考え方が広く認識されるようになったためかもしれない。



春休みは、グランシップで触ろう!!遊ぼう!!

ガラス越しに見るだけのHands-off(触らない)から、Hands-on(参加体験)へ。五感を刺激し、好奇心を育む。実はそんな体験空間が、この春のグランシップに展開される。チルドレンズ・ミュージアムのイベント型ともいべき「わんぱく博物館」をはじめ、身体中の感覚をフル回転させて楽しむ「GO!GO!

おいでよ、グランシップへ!
わんぱく
2002
遊んで学べる子どもパーク

大ホール・海 GO!GO!わんぱく島

いざ、大空間に浮かぶ5つの島へ。カラダの全感覚をフルに使って、新たな感覚世界を探検しよう。全島制覇をめざして、ラリーにも挑もう!

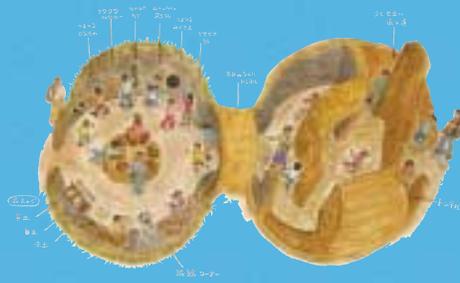


香りの島

好きな香り、嫌いな香り、不思議な香りに遭遇できる島。花、おかし、食べもの、フルーツ……いろんな香りの畑で、においの探検はいかが?何の香りか当てっこしよう…正体は香りの標本箱で確かめられる。

土の島

肌で感じる触覚の島。壁や穴に手をのばせば、ツルツル、ふわふわ、ザラザラ、すべすべ、ニルニル…など、さまざまな触覚が!触ったり、つかんだりして、その正体を確かめよう。筆を使って自由に泥絵を描く「塗り壁コーナー」も。



からだの島

歩く、這う、飛ぶ、かがむといったカラダの動きを意識する島。目をつぶってソロン口と渡る「わたり板の道」や、かがんだり、ハイハイしながら進む「子どもグランシップ」、飛び石のようにケンケンしながら進む「飛び板の道」を、ひとめぐり。



音の島

さまざまな音の響きと遭遇。叩くと不思議な音を出す「コスモコイル」、遠来のような「ディスタントサンダー」、自分の声か洞窟の中のように響く「ボイスリバーブ」、ポンプを押すと鳥の鳴き声が聞こえる「ハンド・デ・ウイスマー」…多様なイマジネーションが聴覚から広がる。

光の島

光と色が織りなす視覚の島。太鼓を叩くと、その振動でカラフルな色と光が変幻自在に姿を変える「万華鏡オブジェ」は必見。おどろきの世界はスクリーン、多面体ミラーに映し出されさらに変化。イマジネーションがどんどんふくらんでいく。



みんなの手形を残して、大きなアートをつくろう!「ハンドプリントコーナー」もあります。

これぞ、五感の大冒険。
GO!GO!わんぱく島

グランシップ開館3周年記念事業
第3回 国際オペラコンクール in SHIZUOKA プレイベント

第二回県民オペラ

蝶々夫人

(全2幕) 〈原語上演/字幕付〉

作曲家プッチーニは言った。
オペラ『蝶々夫人』はその人のために
作られたようなものと。
その人とは、ソプラノ歌手、三浦環。
静岡県出身の両親の間に生まれ、
やがて留学先のロンドンで
日本人初のプリマドンナとして出演。
以来、世界の歌姫として歩み続けた彼女は、
『蝶々夫人』を最も得意としていたという。
静岡県では、彼女の功績を讃え、
没後50年にあたる1996年より、
3年に1度、国際オペラコンクールを開催。
そして、第3回を迎える今年は、
そのプレイベントとして、
また、グランシップ開館3周年記念事業の一環として
初めての県民オペラを立ち上げることとなった。
それは、その名の通り、静岡県ゆかりの
プロ・アマチュアの音楽家たちが参加し、
つくりあげる大舞台。
桜前線より一足早く、美しい歌声の宴を
3度目の春を迎えるグランシップから。

3/10(日)

PM1:30開場 PM2:00開演

グランシップ中ホール・大地

全席指定 / S席 ~~3,500円~~ A席 ~~2,500円~~
(税込) 学生 ~~1,000円~~

主催 / 国際オペラコンクール in SHIZUOKA実行委員会、財静岡県文化財団
後援 / 静岡県、静岡県教育委員会
特別協賛 / 株式会社河合楽器製作所、ヤマハ株式会社、株式会社サミヤ、中部電力株式会社
助成 / 日本芸術文化振興会



蝶々夫人



デザイン画／内田友梨
(清水南高校)

Giacomo Puccini Madama Butterfly

日本を舞台とし、
日本人に最も親しまれるオペラが
今、県民によって立ち上がる。

指揮 鈴木織衛 (清水市出身)

Cast

蝶々夫人 齊藤紀子

第1回国際オペラコンクール in SHIZUOKA
三浦環特別賞受賞

ピンカートン 松浦 健

藤原歌劇団所属 長泉町出身

シャープレス 下村信幸 (清水市)

スキキ 佐藤典子 (藤枝市)

コロー 桑原啓郎 (静岡市)

ボンゾ 初鹿野剛 (御殿場市出身)

神官 田代和久 (御殿場市出身)

ヤマドリ 牛尾次郎 (島田市)

ケート 須山和代 (浜松市)

ヤクシデ 鷺見誠一 (清水市)

役人 杉本年宏 (静岡市)

母親 木戸浩子 (磐田市)

伯母 石川真弓 (菊川町)

子役 長井一馬 (静岡市)

柴田愛子 (浜北市)

大川弥怜来 (吉田町)

藤山愛梨 (静岡市)

オーケストラ 静岡県プロオーケストラ連盟
合唱 静岡オペラシンガーズ



松浦 健



齊藤紀子



鈴木織衛



オールスタッフが顔を揃えたこの日(1月11日)から、振付の稽古がスタート。緊張感の中にもいい笑顔が。



お話を聞いているようで、情感を受け取っている。

それが、オペラの魔法“なんです。”

(中村)

オペラって面白そうー稽古の様子を撮影していたカメラマンがふとつぶやく。はたで見ていても楽しいのだから、やってみるほうはもっと楽しいに違いない。「日本人は何でも一番好きだから、オペラにしても一番高いところにあるものを見たい、目指したい、と思っちゃうんですね。でも、オペラにはいろんな入口、いろんなアプローチがあつて、どの扉から入ってもいいんです。よくオペラやクラシックの人で、見る前に勉強して来い、という人がいますが、僕に言わせればナンセンス。映画や芝居を見に行くのに勉強する必要があるべきじゃない。今回の公演も原語で上演しますが、字幕も出るし、何も知らない人が飛びこめる扉、誰もが楽しめる公演に仕上げたいと思ってるんです」

そう語るのは、静岡県初の県民オペラの演出を手がける中村敬二氏。さすが、誰にでも楽しめるオペラづくりの第一人者である。ところでオペラの魅力って何だろう。

「大きな劇場で多くの観客を集めて上演するものとしては、お芝居よりもオペラの方が多く生き残っている。お芝居は劇場からテントへ、野外へと場を移したりしていろんな活動をしてきたけれど、結果的にオペラとかミュージカルとか音楽のついでに作品が生き残った。ということは、大きな空間、多くの聴衆に訴える力を持つているのは、音楽なんです。」

初演は、約1000年前。美しい当地オペラ誕生。

美しいメロディーで可憐なヒロインを描く作曲家ジャコモ・プッチーニ。「ラ・ボエーム」「トスカ」など数多くの名作を残し、1904年初演の『蝶々夫人』も彼の最高傑作の一つ。またアメリカの開拓時代を題材にした『西部の娘』、中国が舞台の『トゥーランドット』と並ぶ、当地モノ3部作の一つにも挙げられる。

「さくらさくら」など日本のメロディもふんだんに。

19世紀のヨーロッパでは、ジャポニズムが大流行。しかもプッチーニは当時の日本のイタリア公使夫人が好きで、『蝶々夫人』に盛り込まれた「さくらさくら」「越後獅子」「お江戸日本橋」「君が代」など、さまざまな日本の旋律は夫人に教わったものだとか。

日本人が好きなアリア第1位。「ある晴れた日に」

美しいアリアの連続ともいえるこの作品。第1幕の最後を飾る蝶々さんピンカートンの愛の二重唱や、最後の最後、死を覚悟した蝶々さんが我が子を胸に歌う「かわいい坊や」など、魅力のアリアは多々あれど、最大の聴きどころはやはり第二幕冒頭の「ある晴れた日に」。日本人に最もなじみ深く、愛されるアリアをぜひ堪能を。



【第1幕】

舞台は明治初期の長崎。アメリカ海軍中尉ビンカートンは、寄港の折、仲介人ゴローの口利きで、家が没落し去者となった15歳の蝶々さんと結婚式を挙げる。蝶々さんはキリスト教に改宗し彼を愛するが、彼にとっては異国の恋だった。

【第2幕】

【第1場】3年後。蝶々さんは人息子を育てながら、夫が日本を去る前に言った「駒鳥が巣を作る季節に戻る」という言葉を信じ、その帰りを待っている。そんな姿に女中ススキは心を痛め、領事官シャープレスも本国でビンカートンが結婚したことを告げることができずに引き返す。やがて大砲が聞こえ、リンカーン号が入港すると、蝶々さんは喜び、夫の帰宅を夜通し待つ。
【第2場】翌日、妻ケイトを伴つて来たビンカートンは、ススキから話を聞き、罪の呵責からすべてを託して去ってしまう。すべてを悟った蝶々さんは、ビンカートンに子どもを渡すことを約束し、息子を抱きしめた後、父親が自決の時に使った短刀で喉を突いて果てる。

演出 中村 敬一

武蔵野音楽大学、同大学院で声楽を専攻。ウィーン国立歌劇場でオペラ演出を研修。二期会「三部作」、東京室内歌劇場「ヒロシマのオルフェ」、日生劇場「笠地蔵・北風と太陽」で演出力が絶賛され、95年ジローオペラ新人賞受賞。声楽家指導、オペラ普及に尽力。国立音楽大学、大阪音楽大学講師。



蝶々夫人役（ビンカートン役以外のリストと合唱団員）子役はすべてオーディションにより決定。10月下旬より練習を重ねてきた。

オペラ用語解説

【Aria】aria

詠唱。一般にオーケストラの伴奏をもつ叙情的な独唱曲。蝶々夫人の「ある晴れた日」はアリアの代表的な曲の一つ。

【リタターチオ】recitativo

叙唱。朗読調に語るように歌われるもので、一般にはアリアの前に話の筋を運ぶ役を務める。英語ではレシタチーフ。

【アリエッタ】arietta

小さなアリア。簡単なアリアのこと。

【オペレッタ】operetta

オペラをわかりやすく面白くした音楽喜劇。本来は小規模の短いオペラの総称。「ボッカチオ」「メリー・ウィドウ」など。

【グランドオペラ】grand-opera

18世紀フランスで流行した、豪華絢爛な舞台バレエ、大合唱等を揃えた大がかりなオペラのこと。「アイダ」など。

一語一会

今こそ欲張らず、「省事」も大切。



宝井馬琴（講師）

1月20日「正月寄席」の折に来館。寄席には三年連続の出演。

来るたびに思うんだけど、この威容とその向こうの富士山を見ると、バシフィックオーシャンの洋上に立ってような、波出遙かな壮大な気分になる。やっぱり本店は違うね。私もいろんな所に旅して、薩摩富士、蝦夷富士、近江富士といろんな富士を見てきたけど、あれらは所詮、支店だな。月と六ペンスほどの差がある。で、ここには富士山があつて、

海があつて、グランシップがある。これが三幅対をなしている。静岡県は観光大使をやらせてもらっているから、これでもグランシップのことはよく知って、まあ、客観的に見て、今のところフル回転という感じがするね。静岡県の人には、できててもできなくても目標を高く掲げるようなところがあるけど、欲張っちゃいけない。これからは「省事」とい

野村 万之丞

オモガルの時代へ。

「明治の人は、哲学を重く喋ったからオモオモ。二十世紀は、能・狂言といった軽いものを美辞麗句でコケ脅かしをした。これはカルオモだね。二十世紀の末期は、カルカルの時代。そして、二十一世紀こそは本物の時代になるだろうと。だから、重い話題を軽く言う。つまりオモガル。哲学娯楽の時代になると思っているんです」

超過去、超未来。

取材の終わり、氏は今を生きるのではなく、過去と未来を生きたいねと言い、三百年、五百年後のコンテンツを未来のためにつくってあげたいと語った。つまり氏が見つめる未来とは十年、二十年先ではなく、そのもつとずっと先。過去もまた遙か昔々へと遡る。時間の目盛りを変え、謎解きを重ねて出会うたいくつもの真実。そこには超現実的なもう一つの力が働いていたようにも思える。その力の正体こそ、仮面という神：かどつかはわからないけれど。

現在、千個近くの仮面をお持ちだとうかがっています。狂言師というお家柄から、

幼い頃より仮面とは特別な関わり方をされてきたのでしょうか。

「能は仮面を使うけれど、狂言は使わないと思われている。それはあくまでも固定概念だね。実際は能では15歳を過ぎるまで仮面をつけず、一方、狂言は3歳の時から仮面をつける。能と狂言は兄弟の芸能で、母親のDNAを最も受けている兄、それが狂言なんです。母親は猿楽という、音楽と仮面を使う滑稽な物まね芸で、父親のほうの和歌・曲舞といったシュールな芸能の影響をたくさん受けたのが弟である能なんです。

能は仮面を一つの特徴として、謡と舞と仮面というものをとんとん増幅させていったんだけど、狂言では仮面はワン・オブ・ゼム

顔もあれば、仮面もあるし、音楽もあるという、トータル・シァター＝人間劇として成長していったんだね。私の家、万蔵家には、猿に始まり狐に終わる」という言葉があつて、(猿)つづば(狐)という狂言の小猿の役で仮面をつけて「トロー、二十代の釣狐(つづば)で修行を終わるとなされている。だから、僕も2歳半の時に有無を言わず猿の面をかぶらされ、児童福祉法違反で爺さんと一緒に舞台上に出させられた。(笑)そうすると、仮面とつづばあつていくか」といふことを頭で考える前に、まず身体でやっていたということがあると思います。

お爺さまは面打ちでもいらしたそうですね。

「私は直系の長男に生まれましたから、祖父がアトリエでニをぶるい、面を打っている姿を3歳の時からずっと見てたわけ。さらに祖父は趣味で猿楽とか行道面というものを

古美術として扱い、家の中にいろんな仮面を置いたり、飾ったりしてたんだね。で、父親のジネレーションはというと、新劇・演劇運動にかぶれて、やれシークスピアだ、ラシーヌだ、日本の古き伝統を拒絶して個人主義の演劇に走ってましたから、興味がなかったでしょう。祖父は私にああなうてはいけないと。日本のものをしっかりやれ、仮面を大事に守り、増やし、考察していけと、毎日楽屋で衣裳をたたみながら、口癖のように言うてました」

にもかわらず、二十代でヨーロッパに渡られたという事は、

「十代後半からやはり演劇にかぶれましてね。(笑)ナツプザックを背負い、一人ヨーロッパに渡り、そこでめぐり逢ったのがコンスタンティン・スタンブルグというイタリア古典仮面劇の復元者なんです。この、一度は滅びた芸能の劇形態をサルトルやソレリーなどの芸術家たちが、わずかな資料・絵・仮面の断片から復元しててね。そこで僕はミラノ・ベネツィア・パドヴァといったさまざまな地方の人々の特徴を仮面に写してたというところを知ったわけ。ちょうど仮面を扱う人々のシンボリズムもあつて、世界各地の仮面の多さに驚き、さらに仮面のことをペルソナという、それはつまりパーソナル、個は仮面から始まっているというところ、そして、日本という国がいかにかの文化であるかというところにシビクを受けましたね。顔というのは表に出て、最も人に認証されるものではあるけれど、顔が出過ぎると心が苦しくなる。だから、顔を隠すことによつて心は開かれると思つた。つまり仮面ほど正直なものはなく、人



【真伎楽(しんぎがく)について】
伎楽は1500年前、聖徳太子の次代に伝えられ、鎮護国家芸能として寺社などで盛んに上演されたが、平安後期には滅び、現在では伎楽面が正倉院や法隆寺に現存するのみ。まして、伎楽がどんな芸術だったかは知る由もない。仮面研究家でもある氏は、伎楽の今日の再現を志して、10年間に渡り私費を投じ、伎楽面14種23面と衣裳道具を復元。こうして生み出されたのが21世紀の芸術「真伎楽」である。

間の顔ほど嘘つきなものはないと。そして、能面のように無表情、ではなく、多表情であるということがわかってきた。ならば、仮面というものを通して人間の本質を探れないだろうか。そして、日本に帰った僕は、自分の足元にある能・狂言面をあらためて見直し、潰れた古い文化や芸術を活用・再生することをテーマにしていこう、国と国とを結び文化として21世紀の試金石になるようなことをしたいと思つたわけです」

その潰れた古い文化とは、伎楽(ぎがく)であつたわけですね。

「伎楽を日本に誘致したのは聖徳太子で、それに応えてやって来たのが百濟の国の味

摩(みま)し」といふ芸術家ですね。「二人が共同作業で今の奈良県に学校の前身である楽戸(がく)をつくって、そこで教育としてやり始めた。だから、今度、静岡で子供たちにやらせようというのも、我々がまだアジアの一員だった頃の超過去のことを、超未来を生きる子供たちに教えてあげたいというのが目的です。そして、伎楽をただ復元するのではなく、その心を見つけたして今日的に復元しよう。こつこつできあがった作品、真伎楽を、さらに僕は哲学娯楽と位置つけた。哲学娯楽とは、正しい娯楽は哲学であり、正しい哲学には娯楽性がなければいけないということ。簡単にいうとオモガクなんです。重い話題を軽く言う。明治の人は、哲学を重く喋つたからオモオモ。20世紀は、能・狂言などの軽いものを美辞麗句をつけて重々しくコテ脅かしをした。これはカルオモだね。そして、20世紀末期は、若者が軽い話題を軽く言つたカルカルの時代。僕は21世紀こそ本物の時代になると思つているので、重い話題を軽く言う。オモガク、つまり哲学娯楽です」

見えない本物。

仮面は過去に遡るほど特徴的で、伎楽面などはかなり個性的な顔をしています。なぜだと思ひます?それは仮面は目に見えない神と目に見えない心を繋いだ目に見える最初の物体であり、神そのものだから。神とは超人的なもの。カール・ルイスが走るその身体を見て、人は神だと思つた。人間業ではなく神業だと。したがって神は人間

手に持っているのは、鬼面(こんろん)。クルド人から来ているのだろうといわれている。「耳が尖っているでしょう。これは能面の野干(やかん)にもある。こうした共通項を見つけるのがグローバル化ですね」



【のむらまんのじょう】

総合芸術家。300年の歴史を持つ狂言師野村万蔵家八代目当主。幼少より祖父、父(共に人間国宝)の薫陶を受け、1995年に五世万之丞を襲名。20代初めにイタリアで演劇人類学を学び、ピーター・ブルックらとの出会いを契機に独自の芸術観に目覚める。アジアやヨーロッパの演劇・芸能の研究を続け、現在では企画制作・演出・研究・文筆・役者として活躍。長野パラリンピック冬期大会開会式、ねんりんピック広島開会式等をプロデュース。93年文化庁芸術祭賞、97年織部賞、01年にはフランス政府より芸術文化勲章シュハリエ受賞。NHKドラマ『聖徳太子』、大河ドラマ『利家とまつ』などの芸能監修も務める。著書に『心を映す仮面の世界』『マスクロード 伎楽再現の旅』など。国士館大学アジア学部教授。1959年東京生まれ。

よりも遠くまで見られるから、すごく目が

出てる。よく聞こえるから、耳もカキイ。さらに仮面は、その国の歴史の生き証人でもあるんだね。例えばマハカーラという仮面を見ると、3つの目があって、頭の上にドクロがあり、ハコを出している。3つめの目は真実の目と聞いて、その目が開いたときに破壊創造神が真実を見せることや、ドクロはデュルダ

と聞いて、身体と死後の世界との媒介者であること、ハコはカーリーと聞いて、心の中にある悪いものを外に出していることなどを一つの仮面がしゃべり出す。また、仮面は人間が根本に思っていることを最も現してもいい。真伎楽の真は、見えない本物という意味で、心も神も信も見えない本物。どれもシンと読むでしょ。シンという音に本物を見出し

て、伎楽というたわいない仮面劇を使って、シルクロードを逆流する。それが古くて新しい21世紀の文化の共有に繋がるんじゃないかと。つまり文化交流の時代から、文化共有の時代に向かったということだね」

昨年、東京からスタートした『真伎楽』は、奈良、大宰府、そして、近く韓国にも渡るそうです。

「今回は、プロユーザーとしてマスコロードプロジェクトというものを立ち上げたんです。日本からシルクロードを逆流して、感謝の心を込めてお里帰りをしよう。韓国では景福宮という皇居のような、言ってみれば国民感情が最も強い場所であることにより、教科書問題や参拝問題の方入抜きができれば

と。さらに北朝鮮まで行って、日本人が韓国の人と北朝鮮の人を握手させてあげられれば最高だし。うまくいけば、その凱旋公演

は静岡なんだよね」

『真伎楽』にはストーリーはあるのですか。「ストーリーらしきものはあるけれど、起承転結があるわけではなく、悪魔払いをするとか、神をよぶとか。知恵を教えるんだね。過去を大事にしようとか、おへそを出していると言えまにとられますよとか。そういうことをオムハス形式のようにして見せている。例えばガルトダという鳥とハスキというコブラが戦う。ガルトダには嘴に玉が付いているんだけど、それがなぜなのかわからないけれど、鎌倉時代の楽師狛近真こまのちかざね(という人が、教訓集の中で、迦楼羅(かるら)はケラハミをする」と記している。では、ケラとは何か。ケラとは虫ケラである」と。ならば、なぜ虫ケラを噛んでいるのかと

それを調べてみると迦楼羅とはガルトダのこと、ガルトダはインドの神様ヴィシヌの乗り物だとわかる。さらにガルトダは地上にいるヴィシヌに情報をもたらす、すなわち天の支配権を持っている。そして、ヴィシヌが地上にいるときにはハスキというコブラの上に覆っていて、このコブラが地球を支えている。これが地の神で、つまり地と天の間にヴィシヌ

又という幸せがあるというわけ。だから、ガルトダが飛んでくるといことは、その後ろに幸せがあるということ。そして、鳥とコブラが戦うといことは、天と地が戦うこと。鳥が地球をくわえるといことは、和合するということ。こいつはストーリーはある。ただ、それをきちんと解説はしない。見た人の想像力にまかせましよう。チラシモ渡しますから、後でそれを読んで、二度楽しんでいただければと思います」



チケット発売中

マスコロードプロジェクト **4/14**

真伎楽 SHINGIGAKU

昼の部 12:20開場 13:00開演

夕の部 16:20開場 17:00開演

グランシップ大ホール・海

全席指定 S席 3,000円(学生 2,000円)

(税込) A席 2,000円(学生 1,500円)

B席 1,000円(学生 700円)

*チケット購入者を対象に野村万之丞氏による特別講演会(無料)を3/26(火)に開催。(詳しくはP19参照)

21世紀はユニテッド・ステイツ・オブ・アジア=USAとアメリカUSAの時代であるという。「そして、アジアというグローバルな上に、日本というローカルを乗っける。これをグローバルと言ってるんだけど、これにぴったりはまるのが伎楽であり、仮面だったわけです」